

# 第一次世界大戦とフランスの子どもたち

天 野 知恵子

## はじめに

愛知県立大学外国語学部フランス学科の学生たちに、「第一次世界大戦と第二次世界大戦を比べると、フランスにおける兵員の戦死者は、どちらが多かったでしょう」といった質問をすると、7～8割ほどの学生が、第一次世界大戦より第二次世界大戦の方が、多くの戦死者を出したと答える。実際には、前者の方が圧倒的に多かった。なのに、学生たちはなぜ、そのように答えるのであろうか。

20世紀の世界史に関して、彼らが正確な知識を欠いていることもあろうが、日本においては、第二次世界大戦の悲惨なイメージが強烈であるのに対して、第一次世界大戦についてはほとんど知られていないことも、理由の1つにあげられよう。戦争を知らない世代を含め、われわれ日本人にとって、多くの死者を出した「戦争」と言えば何より、第二次世界大戦が思い浮かぶのである。

次世代に平和の尊さを教えるため、「戦争体験」を子どもたちに伝えることは、ひじょうに重要な現在の課題である。だがその際、伝えられる「戦争体験」は、国により、あるいは地域により、大きく異なる。日本の子どもや若者たちが、原爆や空襲の惨状や、過酷な戦場の体験や、引き上げや疎開での苦労、戦時下の厳しい生活などについて話を聞き、「戦争」のイメージをかたち作っているとするならば、フランスの子どもたちは「戦争」について、どのような話を聞いているのであろうか。フランス人にとっての「戦争体験」とは、いかなるものであったのか。

本稿は、こうした疑問から出発し、「戦争」と「子ども」の関わりを軸にするなら、フランスにおける「世界大戦」についてどんな問題提起をすることができるかを考えた試みである。以下ではまず、第一次世界大戦を取り上げてみたい。分析は、次の3つのアプローチにより行う。最初に、今日のフランスで読まれている子ども向けの歴史の本において、この戦争

がどのように説明されているかを紹介する。次に、その内容を受け、20世紀初頭に生まれて戦争を実際に経験した子どもたちに視点を移し、彼らが戦時下でどう生きたのかを明らかにする。そして最後に、当時「英雄」として称えられた子どもたちに着目し、そこにはいかなる子ども像が提示されているのかを検討して、その意味するところを問う。

本稿はこのように、「子ども」に視点をおき、子どもに語られる「戦争体験」をふまえた上で、子どもにとっての「戦争体験」を検証するという手法により、フランスにおける第一次世界大戦の特徴を探究することをめざした論考である。なお、本稿で言う「子ども」とは、初等教育課程に在学する学童を中心に、7歳から14～15歳あたりまでの年齢層をさす。

## I 子どもに語る「大戦争」(第一次世界大戦)

最初に、今日のフランスの子どもたちに戦争がどのように語られているかを考えるため、用いた資料について説明しておきたい。本稿で検討するのは、作家が自由に想像力をめぐらし、どのような筋書にもしていくことのできる「小説」ではなく、ある程度「事実」を伝えることを目的として書かれた、子ども向けの歴史の本である。ここでは、フランス児童書における2つの大手出版社、カステルマン出版社の「歴史の中の子ども」叢書と、ガリマール・ジュネス出版社の「子どもの日記」叢書を取り上げる。いずれも、初等教育課程にある今日の子どもの読者と想定して作られた歴史読み物である<sup>1)</sup>。

「歴史の中の子ども」叢書では、ある時代に生きたひとりの子どもを主人公に設定し、その子の日常生活が、いくつかの章にわけられた物語(フィクション)として進行する。各章末には、時代の背景に関する簡単な説明が付けられ、読者となる子どもたちの理解を助けている。この叢書は、7歳以上の子どもを対象とした「絵本」であり、見開きの片側の頁には文章、他の頁には大きな挿絵が描かれているので、子どもたちは絵を見ながら文章をたどることができる。また、これより年長の子どもの読者対象に想定している「子どもの日記」叢書も、ある時代に生きたひとりの子どもを主人公として設定し、その子が日々の生活について書いた「日記」の形で、物語(フィクション)が展開していく。この叢書にも、カラフルな挿絵が添えられている。また、ほぼどの頁にも、左右の脇に――時には折り返し

にしてスペースを増やし——時代状況についての詳しい説明を載せており、そこには、ピラや写真など当時の資料や、それをわかりやすく絵画化した挿絵などが、たくさん紹介されている。いずれも、絵本形式の歴史書で、フィクションではあるが半ば実話的な読み物である。子ども向けの歴史漫画本が多い日本では、こうした児童書はあまり見られない。

さて、1914年夏に始まり、「大戦争 La Grande Guerre」と呼ばれた第一次世界大戦は、どのように語られているであろうか。「歴史の中の子ども」叢書におさめられた『大戦争の時代』の舞台は1918年で、農村で祖父母と暮らす10歳のアントワーヌ Antoine が主人公である。以前はパリに住んでいたが、家具職人の父が出征し、母がパリで勤めに出ることになったので、祖父母のもとにあずけられた。ある時母が訪ねてくるが、列車が途中で何時間も止められ、到着が遅れるのでアントワーヌはいらだつ。ようやく会えたものの、一日だけの通行証しか与えられなかった母は、あわただしく去っていった。砲弾工場で働く母の口から語られるのは、ドイツ軍の空襲や巨大砲の脅威にさらされる、パリ市民の緊迫した生活である。

またある日アントワーヌは、近隣の女性が息子の戦死を知らされる場面に偶然立ち会い、沈み込んでしまう。だがその直後、父が休暇を得て息子に会いに来たので、彼は驚喜する。髭面の父から聞いたのは、塹壕戦の実態に関する話であった。土にまみれ、虫や鼠にたかられる日々、闇雲の突撃と殺し合い。「ドイツ人を殺したの？」と尋ねるアントワーヌに、父は「奴らか、私かだったんだ」と答える。父が負傷したとき収容された野戦病院には、英仏の兵士ばかりでなく、アルジェリア人やセネガル人、さらにはドイツ人も収容されていた。父と同じ職業で、アントワーヌと同じくらいの年齢の息子がいるドイツ兵と、もし病院でなく戦場で会っていたら、互いに殺し合っていたらう——父の目からは涙があふれる。父はアントワーヌの胸に暗い影を残して去っていった。

そして11月11日がやってくる。突然の歓声で授業は中断され、村中の鐘が鳴り響く。正装した村長が教室に来て戦争の終結を告げ、広場に集まった村人は、歓呼のうちに国歌ラ・マルセイエーズを合唱した。「休戦協定 armistice」という耳慣れない言葉を聞いて、「もう戦争はないんだよね」と問うアントワーヌに、祖父はこう答えるのだった。「この戦争が本当に、最後の戦争 la der des ders になるようにな。そうできるかどうかはわからないが、困難でもやってみる価値はある」と。

こうしてこの物語は終わる。村中の豚がみな「ギヨーム Guillaume」とドイツ皇帝の名前で呼ばれ、「ボッシュBoche (ドイツ人)」への軽蔑があらわに示されていたことや、新聞や手紙で検閲が行われていたこと、農村の学校においても防毒マスク装着訓練が繰り返されていたこと、あるいは、戦場の現実が明らかになってきた戦争末期においても、飛行機にはなおオマンがあり、空中戦の英雄がもてはやされたことなど、戦時下の社会状況が背景に語られる中で、鉛の兵隊で戦争ごっこをするのが好きだったアントワヌは、父母の話の聞いたり、戦死者遺族の慟哭を間近で見ながら成長していくのである。

他方、「子どもの日記」叢書におさめられた『大戦争の中で』は、1914年夏に9歳になった少女ローズ Rose を主人公にしている。フランス北部の炭坑町に住み、兄と弟がいて、父は鉱山会社の帳簿係、母と祖母の6人家族という設定である。父は開戦後すぐに出征した。そしてドイツ軍が北フランスに侵攻してくるのにもない、ローズ一家もパリへ、さらに南部へと、縁戚を頼りに避難する。戦時下のローズはそれゆえ、異郷の地で暮らす避難民となる。母は家族手当を支給されているが、生活は苦しく、ローズは農作業やガチョウの飼育を手伝う。新しい学校では、献金を募ったり、軍事衣料の製作や収集をして、子どもたちも戦争に協力している。

1915年の新学期、婚約者を失った喪服の女性教師が新たに赴任した。学校では「永遠のフランスに栄光あれ」といった詩や、「労働は愛国心、怠慢は卑劣だ」のような標語を習い覚え、犬や馬まで軍用に徴発されていく。そして1916年、ヴェルダンの会戦以後いちだんと緊張が高まる中で、父からローズに届いた手紙には、「お前がお母さんをよく助けていることも、学校でいい成績をあげていることも知っているよ」と書かれていた。

近くの城館が病院となって、修道女たちが負傷兵の世話をしている。城館の女主人は兵士たちに慰問袋を送る「銃後の代母 *marraine de guerre*」となり、質素に暮らしている。また人手不足ゆえに、夏の収穫時にはスペインから農業労働者がやってきた。そんな中で、父が一週間の休暇を許され、久しぶりに家族がそろそろ。戦争の話聞きながらの兄に、父は、下士官が兵卒に辛く当たると語るのだった。戦争はきれいごとではないのだと、ローズは考える。

1916年の新学期には、また新しい女性教師が赴任した。先生は子どもたちに、「祖国のため、いつもドイツへの憎しみを持ちましょう」と書か

せる。冬は暖房が不十分で厳しかった。翌17年6月、ローズには妹が誕生するが、その直後、悲劇が一家を襲う。父の戦死が伝えられたのである。形見として残された最期の手紙には、「私が戦うのは、愛しいお前たちのためだ」と記されていた。兄には、ヒロイズムをあおる者たちの言うことを信じないよう、弟には、良い sage 子でいるよう、そしてローズには、「お前が頼りになるとわかっているよ」と書き残して、父はこの世を去ったのである。

その後はいちだんと厳しい日々が続いた。砲弾工場で働く叔母から聞くのは、女工たちのストライキの話で、ドイツ占領地から引き上げてきた従兄弟から聞くのは、故郷の惨状、そしてパリへの攻撃である。兄は父の仇をうつとあって、1918年春に入隊した。祖母は何も語らなくなり、母も時折涙を見せる。13歳を迎えるローズは、母を励ますために「初等教育修了証」を取ると約束し、見事試験に合格した。

そして1918年秋。「スペイン風邪」の記事が新聞に出る中で、11月11日がやってくる。だがローズ一家が故郷に戻ったのは、それから2年後だった。家は破壊されていた。兄は除隊し戻ってきたが、「もう以前のようにではなかった」。避難先で出会った友人からも、父が帰還したが毒ガスで体をこわしているの、母と自分で切り盛りしていかなければならないという手紙が来た。ローズはこの戦争が、「最後の戦争」になるよう願いながら、教師になることをめざす。

戦時下の少女の生活を日記の形でたどるこの物語は、ここで終わる。メインの物語につけ加えられた補足の部分では、植民地から徴集された兵士がいたことや、攻撃命令を拒否して処刑された兵士がいたことなども含めて、「大戦争」に関するかなり詳しい説明が載せられている<sup>2)</sup>。

さて、このように子ども向け歴史読み物を見ていくと、第一次世界大戦期はフランスにとって、またフランスの子どもたちにとって、ひじょうに困難な時代であったと描かれていることがわかる。父の出征や戦死、一家離散や避難・疎開、厳しい耐乏生活、祖国への忠誠と敵への憎悪、情報の操作など、アントワヌとローズの物語に出てくることはみな、後に日本が、第二次世界大戦下で経験することになる苦難の諸相そのものである。フランスの子どもたちは日本の子どもより30年ほど早く、悲惨な戦争を体験していたことになる。

実際にはどうだったのであろうか。第一次世界大戦は子どもたちの生活

に、いかなる変化をもたらしたのであるだろうか。そこで次に、フランスの子どもたちは大戦下でどのように生きたのかを見ていくことにしよう。

## II 第一次世界大戦下で生きた子どもたち

「大戦争」期の子ども史を考える上で出発点となる研究は、1993年にステファーン・オードワン＝ルーゾーによって書かれた『子どもたちの戦争1914-1918年——文化史論』である<sup>3)</sup>。彼はこの書物において、第一次世界大戦期、戦争遂行のため子どもに対してどのような働きかけが行われたか、いかなることが教えられたか、どんな子どもが賞賛されたか、そして、子どもたちはどう行動したかといった問題を検討した。それから現在までの間に、この戦争下で子どもたちが描いた絵画の分析や、戦争中の子どもの日記の紹介、さらには、戦争で親を亡くした110万人とも言われる子どもに関する考察など、子ども自身に即した研究が、さまざまなアプローチにより行われている<sup>4)</sup>。以下ではそうした研究成果をふまえながら、第一次世界大戦と子どもの関わりを追ってみよう。

### (1) 戦争に動員される子どもたち

開戦直後の1914年9月、新学期に向けてときの公教育大臣アルベール・サロー Albert Sarraut は、次のような通達を出した。「私は新学期はじまりの日、どの町でも、どのクラスでも、生徒に対する教師の最初のことばが、祖国に向けて心を奮い立たせるようなものであること、そして、最初の授業は、われわれが武器を取ったこの神聖なる戦いを、称えるようなものであることを望む<sup>5)</sup>」。

フランスがすべての政治党派を結集し、挙国一致で戦った第一次世界大戦は、正当かつ神聖な戦いであるとして、学校で大々的に宣伝された。開戦から終戦にいたるまでの間に、何度も通達が出され、視学官の監視の下で、教員にも学童・生徒にも、フランスを賛美し戦争に協力することが求められた。戦争はまさに、学校教育の中心となった<sup>6)</sup>。

開戦当初の意気込みは、戦争が長期化して諸々の困難があらわになる中で少しずつトーンダウンしていったが、それでも学校は最後まで、子どもたちを奮い立たせようとした。あらゆる教科に戦争がその姿をあらわした。作文では、「兵士となったお父さんに君がふさわしくなるために、今年、

君は学校でどんなことをしますか？」といった課題が出され、算数においても、戦艦が商船に追いつく時間の計算など、戦時色の濃い問題が出された<sup>7)</sup>。また男の子たちに対しては、将来兵士になることを前提として、懸垂、ボクシング、銃の扱い方などの体育教育が行われた。「健康な肉体と愛国の精神」を育むことが、その目的であった<sup>8)</sup>。

上述の物語において、主人公ローズが受けたことになっていた「初等教育修了証」取得試験においても、戦争に絡んだ出題が実際に行われている。たとえば1918年には、作文で次のような課題が与えられた。「あなたの知っている家族が、期待と不安の何日かを過ごした後に、激しい攻撃を受けた戦線で戦っている息子から手紙を受け取りました。その情景について書きなさい。そして、それについてあなたが考えたことを述べなさい」<sup>9)</sup>。このような難しい問題を前にして、受験した子どもたちはどんな文章を綴ったのであろうか。

子どもたちは戸外では、戦争ごっこに興じた。女の子は看護婦役であった。雪が降ると、ドイツ皇帝に模した雪だるまをつくり、つぶてを投げた。その情景を絵日記に描いたある子どもは、「大きくなったらドイツ兵をうまく殺すのに役立つだろう」と書いている<sup>10)</sup>。室内で遊ぶときも戦争がついて回った。パリの大手デパートが出したクリスマス用玩具カタログを分析すると、新作玩具のうち戦争おもちゃの占める割合は、1914年までは20～25%程度であったのに対して、開戦後には50%になっている<sup>11)</sup>。開戦後、サンタクロースは白髭をはやした軍服姿であらわれ、すごろくのゴールは連合国のベルリン入場になった<sup>12)</sup>。

児童書はことに、戦争の影響を大きく受けた。子ども向け読み物に戦争が登場する現象は、イギリスでもドイツでも見られたが、フランスではとりわけ顕著であった。廉価な読み物は、戦争を取り上げて出版部数を戦前の2倍、3倍に伸ばした<sup>13)</sup>。フランスではまた、小さな子ども向けの本にも戦争がその姿をあらわした。ABCを教える幼児絵本はたとえば、「大砲 *artillerie*」や「防空壕 *abri*」のA、「爆弾 *bombe*」や「銃剣 *baïonnette*」のBというようにことばを並べてアルファベットを綴った<sup>14)</sup>。定期刊行物においても同様で、「いたずらっ子リリ *L'espigle Lili*」や「ベカシーヌ *Bécassine*」など少女向け雑誌・漫画で人気の主人公までが、愛国心を発揮して戦場をめざす姿で描かれた<sup>15)</sup>。

カトリック教会も、子どもたちを戦争に向けて動員する点では学校に引

けを取らなかった。教会は子どもたちに対して、「祈り」を通してフランスの勝利に貢献するよう働きかけた。たとえばアンジェの司教は、開戦後、司教区の聖職者たちに対して次のように言っている。「子どもたちを祈らせましょう。ひじょうに純真な彼らの魂が、イエスの御許においてわれわれの大義を弁じ、勝利をもたらしてくれるでしょう」。またブルジュ大司教も、1915年2月11日をフランス全教区の子どもたちが祖国のために祈りを捧げる日にしようと呼びかけた。「ひじょうに感動的」である上、「われわれの愛しい祖国のために、大きな超自然的な効力」を期待できるからというのである<sup>16)</sup>。

子どもの祈りから登場したのが、「子ども十字軍 *croisade des enfants*」であった。その発端は、ポルドーにあったカトリック女子学校の13歳～14歳の生徒たちが、1915年1月から祖国のため自主的に「祈りと捧げもの」を習慣として行っていたことだったという。こうした行為は、聖職者たちからの賛辞を得て広がっていった。そして1916年はじめに、「子ども十字軍」が結成された。フランスの勝利を願うとともに、祖国のため死んだ者たちの永遠の救済に、祈りを通して貢献することがその目的であった。「十字軍兵士」となった子どもはそれぞれ、実際の戦場における自分の担当地域を受け持ち、そこの兵士たちのために祈ることになっており、精進の度合いに応じて、「兵卒」から「将校」までのランク分けもなされた。

「子ども十字軍」が戦うさまを、『イエスの心の使者 *Messenger du cœur de Jésus*』誌は次のように描いている。子どもたちは祈りによって「密集した軍団にまとまり、星降る夜、塹壕の上にやってくる。兵士の数は倍増する。子どもたちも戦いに来たのである」と<sup>17)</sup>。子どもたちもまた、次のように報告を行った。「攻撃当初からわれわれは、ソムとヴェルダンの諸戦線に全力を集中しています」<sup>18)</sup>。こうして「大戦争」期のカトリック教会は、子どもに対する信仰の強化をめざしながら、彼らを戦争へと駆り立てたのであった。

戦争に向けて子どもを動員することは、フランスだけでなくイギリスでもドイツでも行われたが、各国で違いもあった。子どもに対して、どのような働きかけが行われたかを見ていくと、一口に総力戦と言っても、それぞれに特徴があったことがうかがえる。たとえばイギリスでは、愛国的な呼びかけも、個々の子どもに対してより、ボーイスカウトやスポーツ団体などの集団を通して行われることが多かった<sup>19)</sup>。また上述したように、幼

兎本にまで殺戮のことは並べたのはフランスに特有の現象である。ドイツの児童書には、戦争について内実ある情報を与えることをめざしたものがかなり見出された。もとより真実がそのまま伝えられたはずもなかったが、敵味方の戦力比較や、年表や戦場の地図などを挿入して、「ドキュメンタリー」としての性格を持たせようとする傾向があった。この点は、イギリスでも同様であった<sup>20)</sup>。

これに対しフランスの児童書は、戦争に関する具体的な情報をほとんど何も伝えなかった。子どもに語られるのはいつも、フランス軍兵士の完璧なヒロイズムであり、フランスの勝利で世界は再生し文明化するといった文章ばかりが目立った。それゆえ、写真を90枚近く掲載した『戦争：なぜいかに行われるか』という青少年向けの本でさえ、1918年版は1916年版と比べて、何ら変わっていなかった<sup>21)</sup>。フランスにおける子ども向け読み物の目的は、祖国の大義をひたすら子どもに信じさせることにあった。

フランスの児童書ではまた、ドイツへの憎悪と軽蔑が露骨に示された。ドイツ人は乱暴で情け容赦ない悪党とされ、その血を受け継ぐはずのドイツの子どもにも、敵意が向けられた。人気のあった少女向け週刊誌『フィエット *Fillette*』は、1915年5月、読者欄で「ドイツに友だちがいるのですが」と問いかけた少女に対して、「ドイツ人の子のことは断念しなさい」というすげないアドヴァイスを行っている<sup>22)</sup>。ジェノサイドをほのめかすようなことばさえ登場した。たとえば1917年10月の『ディアボロ・ジュルナル *Diabolo-Journal*』誌には、「不潔な民族！ この世界からいつ消えるのでしょうか」という文章が見出される<sup>23)</sup>。フランスの子どもたちに対してまき散らされた反ドイツのプロパガンダは、かくも強烈であった。それゆえ子どもがドイツと言うたび、「口が汚れたと思ってエプロンの端でぬぐう」ようになっても、不思議はなかったのである<sup>24)</sup>。

大戦期フランスの児童書に見られるこうした特徴から、当時のフランス人が第一次世界大戦をどのように考えていたかをさぐることができる。フランスがイコール正義であり、自由であり、文明であり、卑しい野心を抱いたドイツには、徹底した制裁を加える必要がある、というのである。このような思いの背景にあるのは、何より、普仏戦争の敗北の記憶から生じた悔しき、腹立ち、復讐心であった。大戦中、フランスの国土の一部がドイツに占領されたり、戦場となったことが、これに拍車をかけた。フランスにはまた、共和国を守れと呼びかける革命以来の伝統があり、第三共和

政下で広がった「進歩と文明の国フランス」という自負が、この伝統をさらに後押しした。専制君主を戴く野蛮な後進国ドイツに、正義の裁きを下さす——フランスはこうした強い使命感をもって第一次世界大戦に臨んだのであり、その怒濤のような勢いに、子どもたちも巻き込まれていったのである。

## (2) 子どもたちの「戦争協力」

近年の第一次世界大戦史研究においては、子どもは単に戦争の「罪なき犠牲者」として位置づけられてはいない<sup>25)</sup>。愛国心をあおる学校や教会からの強い働きかけのもとで、子どもたちも主体的に戦争に関わる機会を得た。さまざまな形で、子どもたちもまた、戦争に協力したのである。

たとえば学校で、教会の集まりで、子どもたちは自分の小遣いを献金にあてた。「すべてをフランスに」という標語の下、学校や教会では定期的に献金活動が行われたからである。それだけではなく、戦時下のフランスで特別に設けられたさまざまな機会、たとえば「兵士の日」や「孤児たちの日」に、子どもたちはボール紙を切って彩色したメダルを作り、街頭に立ち、それを販売して寄付を募った。募金や献金によって、時には相当な金額が集まることがあった。たとえば1914年12月31日に、ソム県内の学校において集められた募金は、125,000フランを超えている。また1915年3月1日には、ウール県のある学校の28人の生徒だけで、3,000フランを集めた<sup>26)</sup>。このように、戦時下の募金活動では子どもがその重要な担い手となり、大きな役割を果たした。

多くの子どもたちは、まじめに、熱心に活動した。というのも、彼らは周りの大人たちからいつも、お父さんやお兄さんは、君たちを守るために戦っているんだと言われていたからである<sup>27)</sup>。そう聞かされると、子どもたちはがんばらざるを得なかった。お菓子やおもちゃを買うのを我慢して献金し、街頭募金で声をからして寄付を訴えた。「勝利のために君には何ができますか?」は、作文でよく出された課題であったが、こうした問いかけは子どもに対して、金銭的・物質的貢献を求めたのみならず、精神的・道徳的な意味でも影響を与えて、子どもたちの行動を左右し、自制を促したのである<sup>28)</sup>。

近年の研究は、「大戦争」期には子どもに「罪悪感を感じさせること culpabilisation」によって、統制が行われたことを明らかにしている<sup>29)</sup>。学

校で、また教会で、子どもたちはたえず、戦場の兵士にふさわしくあるよう、「小さな兵士 *petit poilu*」としての自覚を持つよう促された。しかもそれは単に、愛国心を示して募金や献金を行い、祈ればすむことではなかった。子どもの本分は勉強にあるのだから、成績を上げ「よき学童 *bon écolier*」になることがそもそも、子どもの重要なつとめだとされたのである。1915年にある視学官は、「さあ子どもたち、君たちの銃を持て。それはペン軸のことだ」言っている<sup>30</sup>。子どもたちは前線の父や兄に銃後の憂いを与えることのないよう、立派な行いをすることを求められた。それゆえ宿題や手伝いを怠けたときも、寝坊し遅刻したときも、子どもたちはそのつとめ、戦場の兵士に恥じなければならなかった。

戦場から送られてくる手紙も、子どもたちには大きな圧力となった。兵士たちには万感の思いがあっただろうが、検閲もされる手紙の中で書けることは限られていた。残してきた家族が何とか暮らしていけるよう気遣う兵士たちは、子どもに対して、母の助けになりなさい、かしくしていなさいと書き送らざるをえなかったであろう。先に見た物語におけるローズのように、「大戦争」期の子どもたちは実際に、お前が頼りだという父からの手紙を受け取っている。「私が書くことを良く覚えておくんだ。お母さんを敬い、いつもお母さんの言うことを聞きなさい。というのもお母さんには、父さんと母さん両方の重い役目があるのだから……みんな、良い子でいなさい」というように<sup>31</sup>。父親が戦死してしまったら、そうした手紙が遺書になった。遺言となった父のことばは、子どもたちの心にいっそう重く響いたことであろう。

子どもたちは「罪悪感」を背負って、「大戦争」期を懸命に生きた。それゆえ彼らは、大きな力を発揮することもできた。たとえば学校が休みのとき、子どもたちは農場や菜園で働いた。農作業が授業時間に組み込まれることもあった<sup>32</sup>。家では母親が働きに出た場合、子どもは年齢に応じて家事を任された。買い物はとりわけ子どもの仕事になったが、物資の乏しい中、行列を作り、長時間待たされたあげくによく品物を手にすることができるよう状況にあっては、何か買うにも知恵や忍耐が必要であった<sup>33</sup>。さらに、国債が募られる際には、学校から子どもを通して親への呼びかけが行われた。子どもが熱心に言うので、親は応じざるを得なかったからである<sup>34</sup>。子どもが大人を支えたり、大人を動かしたりすることもあったのである。

実際、「大戦争」期のすべての子どもたちには、前線の兵士を励ますという大切な役割が与えられていた。「子ども十字軍」もその1つの形であったが、子どもたちは学校においても、慰問の手紙を書いたり、手袋や襟巻き、たばこなどの品物を作ったり集めたりして前線に送った。編み物や包帯作りは、女の子たちの大事な仕事であった。学校ではまた、「クラスの名付け子兵士 *filleul de la classe*」という制度が取り入れられた。身寄りのない兵士に対して、学級ぐるみで家族がわりになろうというのである。「ぼくはあなたをクラスの写真で見ただけです。あなたを知りませんが、あなたが好きです。そして、フランスのすべての兵士を尊敬しているように、あなたのことを尊敬しています」。子どもたちはこんな書き出しで文章を綴り、「名付け子兵士」たちに語りかけた。そして「名付け子兵士」たちは、休暇が許されると子どもたちに会うため学校に来た<sup>35)</sup>。身寄りのない兵士を支えるために考案されたこうした疑似家族において、子どもたちの存在は大きな意味を持っていた。

子どもが主体的であったというより、大人に強制された子どもが、健気に従っただけであると言われれば、そうであろう。大人は子どもに日々「罪悪感」を持たせながら、学業に励み戦争に協力する子どもを作り出そうとした。だが、募金や国債の募集において見たように、子どもが熱心になればなるほど、大人もそれに真剣に向き合わざるを得なくなる。大人に働きかけられて子どもが動き、子どもの熱意に促されて大人が動く、という状況ができあがっていった。一生懸命な子どもの姿は、ときに銃後の大人にも「罪悪感」を抱かせ、大人を動かす力をも発揮したのである。

子どもたちはまた、戦時下の日々を生きるため、たくましくあらねばならなかった。父親のいなくなった家庭で、母親も働くとなれば、子どもは早くから自立せざるをえなくなる。物語の主人公ローズのように、よく勉強もしながら弟妹の面倒をみ、家事をこなし、時には気落ちする母や祖父母を力づける子どもたちがいたのである。戦争は彼らに、いくつもの役割をこなすよう求めたと言えよう。そして、戦争によってもたらされたこの状況の中から、第一次世界大戦期に特有の「英雄少年・少女」像がつくり出されることになる。

### III 英雄になった子どもたち

フランスでは大戦期から戦後にかけて、子どもの手本とされる年若い「英雄」が何人も登場する。いずれも、「大戦争」下で格別の働きをしたとして称えられた子どもたちであった。たとえばジャン＝コランタン・カレ Jean-Corentin Carré は、1900年にブルターニュに生まれ、15歳の時、年齢を偽って歩兵隊に入隊、のち飛行士となり、1918年に空中戦で戦死した。この少年を有名にしたのは、彼が初等学校の恩師にあてて書いた次のような手紙である。「ぼくは敵のくびきの下で生きることはできません。だから兵士になりました。そうです、この名誉の感情、ぼくはこれを学校で学びました。そして、ぼくにこれを教えてくれた人のひとりが、先生、あなたなのです！ すべての小学生が、ぼくが教わったのと同様、教えてもらったことを理解するようぼくは願っています。人生は、十分に充実したものでなければ、なにものでもありません」<sup>36)</sup>。

第三共和政期の愛国心教育が生んだ模範例とも言うべきこのカレが、もっとも年長の「英雄少年」であったとするなら、最年少は、「木の銃を持った子 l'enfant au fusil de bois」として有名になった少年である。名前は明らかにされていないが、舞台はアルザスとされており、戦争初期の話と伝えられている。7歳の少年が、ドイツ兵をねらって、木の棒あるいはおもちゃの銃を構えた。その結果、射殺されたか、もしくは銃の台尻で殴り殺された。少年はほほえみを浮かべて死んでいった。その祖父によれば、少年は父親が出征する際、母と家とをまかせると言われたので、「より大きな何者かになるため、小さな子どもの心を捨てた」のであるという<sup>37)</sup>。ドイツ兵に出会ったとき、7歳の少年は、彼らに恐怖を与えるほど「大きな何者か」になっていたのであろうか。

女の子も「英雄」になることができた。一番の「勇者」は、ドゥニーズ・カルチエ Denise Cartier という10歳から13歳くらいの少女である。パリで空襲にあい、足を切断した。それでも彼女は平然と、「私はフランスに足を捧げたの」と言ったという。後日談の中には、彼女が兵士たちのために編み物をしたいと求め、「その方が走ったり縄跳びしたりするより有益でしょう」と語ったとするものまである<sup>38)</sup>。7歳の少年同様、この少女も大胆不敵で、ひどい目に遭っても堂々としていて、周りの大人をたじろがせるほど冷静である。

そうした勇者たちの中でも、もっとも名を馳せることになったのが、エミール・デプレ Émile Desprès という、13歳とも14歳とも言われる少年であった。1914年秋のはじめ、ドイツ軍に占領された北フランスの炭坑町が舞台である。負傷したあるフランス人の伍長が、フランス人女性に乱暴を働こうとしたドイツ兵を射殺し、処刑場に引き出された。そこへひとりの少年が走り出て、伍長に飲み物を差し出した。この少年がエミール・デプレであった。ドイツ兵たちはすぐにデプレを撃とうとしたが、その将校のひとりが、少年に向かってこう言った。お前がこの伍長を殺してみろ、そうすればお前の命は助けてやる、と。デプレはうなずいて銃を受け取った。そして、そのドイツ人将校に向けて発砲し、殺害した。その結果、少年もまた殺されてしまった<sup>39)</sup>。

何とも血なまぐさいこの話が子ども向け読み物などで取り上げられ、デプレは「大戦争」きっての少年英雄となった。なぜであろうか。その大きな理由は、彼がドイツ兵に屈しない断固たる信念を持っていたとされることであろう。危険を顧みず瀕死のフランス人兵士に水を与え、ドイツ人将校の申し出を受けたと見せかけて、臆せず敵に銃を向けた。「残忍なドイツ兵」と「高潔なフランス人」という対比を背景にして、デプレは自らの命を省みない「勇敢」な行為を、二度にわたって繰り返したわけである。この点が賞賛されたと言えよう。彼はフランスの大義に我が身を捧げた勇氣ある「殉教者 martyr」として、称えられたのである。

だが、そうした「英雄少年」なら、過去にも存在した。たとえばフランス革命期に、革命軍の少年兵士バラは、反乱者にとり囲まれ「王様万歳」と叫べと言われて、「共和国万歳」と叫びながら殺された愛国少年として、第三共和政期の教科書に登場した<sup>40)</sup>。それゆえ、「大戦争」期の子どもたちも知っていたかもしれないバラの伝説と、エミール・デプレの話には、どこか似通うところがある。けれども、両者には大きな違いが存在する。バラが人を殺していない「無垢」の英雄であったのに対して、デプレは自らの手を血で汚したからである。

デプレは、単に祖国に殉じた悲劇の英雄であるだけでなく、敵を倒す行動力を備えた少年であった。この点は重要である。というのも、この時期の他の「英雄少年」にも、そうした特徴が見られるからである。オードワン＝ルーゾーは、デプレや「木の銃を持った子」以外にも、勇敢な行為で名をあげた11人の少年(13歳～17歳)に言及しているが、うち5人が、

ひとりかときには大勢の敵を殺した勇敢さを称えられている。敵を倒したのではなく、祖国に殉じ毅然と死んだ点を称えられたのは3人で、両方であったのはデプレひとりである<sup>41)</sup>。

このように、「敵を殺す」少年英雄が「大戦争」期に登場した背景を考えてみると、当時の大人が、子どもに何を求めていたかをあらためて考えさせられる。フランスが正義を体現するとされた戦争において、子どもはドイツへの憎しみを持つよう教えられた。大戦時にパリ18区の初等学校生徒であった子どもたちが、戦争をテーマにして描いた絵が今日残されているが、そこには、爆発で吹っ飛び、首がちぎれ、腹から血を流して横たわるドイツ兵の姿が描かれている<sup>42)</sup>。子どもたちは絵を描くことで、ドイツ兵を殺した。そして、デプレや他の「英雄」たちの話は、いざとなったら本当に敵を殺せと子どもたちに語っていたのである。敵に対する強い憎悪と軽蔑が、子どもの暴力化 *brutalisation* をもたらしたのであった<sup>43)</sup>。

しかもデプレの「暴力」は、単に勇ましかったというだけのものではない。彼は残酷な提案を逆手にとって、敵を嵌めることができたのである。その小気味よさがいっそう、フランスの大人たちに受けたのであろうが、このとっさの機知については、どのように説明することができるだろうか。

大戦下の子どもたちは、男性が出征した後の穴埋めに駆り出された。父なき家庭を託され、家族を支えて生活の切り盛りをしながら、農場の手伝いや街頭募金においても活躍しなければならなかった。そうした日々を送るためには、知恵をつけることが重要であったろう。判断力や行動力が求められ、ときには、駆け引きも必要であった。デプレのしたたかさの背景には、当時の子どもをとりまくこのような環境があったと考えることができる。厳しい戦いの中で生きる子どもの中から、敵と堂々わたり合うための度胸を身につけたつわものが出てきたのである。

子どもや弱者が、知略によって恐ろしい敵を倒すという物語なら、昔話にも見られた。たとえば、フランスの子どもにとってなじみ深い『ペローの物語集』は、17世紀末に書かれた作品であるが、「親指小僧」や「長靴を履いた猫」が、計略を用いて鬼を退治する。この物語集の背景には17世紀社会の厳しい世相があるのだが<sup>44)</sup>、その点においては、デプレの物語が「大戦争」の苦難を背景にしているのと似ている。それでも、『ペロー物語集』は楽しい読み物である。間抜けな鬼が追い詰められるさまは、ときにグロテスクであるがユーモラスで、賢い主人公が鬼の財宝を奪って繁

栄するという結末ともあいまって、愉快的印象を与えるからである。ところがデプレの物語には、そうした明るさは少しも感じられない。少年は酷薄なドイツ人将校に報いを与えることのできる知恵者であるのに、生き残ることはできない。自分自身も殺されてしまう、救いのない結末である。

「大戦争」期の子どもの英雄たちには、何かしら暗い影がつきまとう。おもちゃの銃をかまえて撃たれ、平然と笑みを浮かべて死んでゆく7歳の子。足をなくしたのに、はねたり飛んだりするより大事なことがあるとうそぶく少女——彼らの「大胆さ」には、冷やかさが漂っている。強い愛国心を持っているが、革命期のバラのように「純粹無垢」というわけではなく、もの分かりはよいが、ペロー物語集の主人公のように「才気煥発」というのでもない。大人をしのぎ、超えるほどの「知恵」や「分別」や「行動力」はあるものの、生命力は感じさせない子どもたちである。

このように、「大戦争」期のフランスがつくりあげた年若い「英雄」像には、子どもであることをやめてしまったかのような、初々しさを欠いた子どもの姿を見出すことができる。早々と老成して先を見通し、ときには大人を死に追いやりさえする子どもたち——「大戦争」期の子どもの手本とされたのは、子どもであって子どもでないような、その点においてどこか不気味とも言うことのできる、子ども像だったのである。

ただし、誤解のないようにしておこう。デプレもカルチェも「木の銃を持った子」も、みな伝説の言うところであって、実際そうであったというわけではない。強面の裏にある彼らの本当の姿は、いまだ知られていない。

## おわりに

本稿は、フランスの子ども向け歴史書の中で、第一次世界大戦がどのように語られているかという問いかけから出発し、日本では印象の薄いこの戦争が、フランスでは厳しく辛い日々であったと描かれていることをまず明らかにした。次に、この戦争を実際に子どもたちはどう生きたかについて考察し、その上で、英雄として喧伝された子ども像の分析をふまえて、「大戦争」が子どもに何をもたらしたかを見た。フランスが自らの正当性を信じ、ドイツへの激しい憎悪と蔑視をもって臨んだ第一次世界大戦は、子どもに子どもらしくあることを許さないような状況をつくり出したと言えるであろう。そこから、早熟の「英雄」たちが生まれた。そして、そうした

「英雄」を見倣うよう教えられた子どもたちこそが、戦後の文化を担う若者たちへと成長していくことになるのである。

とはいえ、子どもは素直に大人に従ったのであろうか。たとえば非行に走るという形で、大人への「反抗」もありえたらう。青少年の「非行」は、開戦後確かに増加している<sup>45)</sup>。だが、本稿の対象である年代の子どもにとっては、その形の「反抗」はまだ少し早かったであろうから、彼らの反応を知ることは難しい。それでも、手がかりがないわけではない。たとえば戦争の絵である。子どもたちが一番多く描いたのは、海戦や空中戦、あるいは、ドイツの旗を奪取するという、現実にはあり得ない場面だったという。ドイツの残虐さが子どもの想像力にあまり影響を与えていないと残念がるコメントが当時なされているが<sup>46)</sup>、そうした大人の思惑をよそに、子どもたちは「戦争」を、たとえば陣取り合戦のようなイメージで、彼らなりに楽しく思い描いたと見ることもできる。

大人のたてまえや身勝手な、はっきり感じとった子どもたちもいた。のちに精神分析学者・児童心理学者になるフランソワーズ・ドルト Françoise Dolto は、カトリックの恵まれた家庭に育ち、戦争が終わったとき10歳だった。子ども時代の回想を語る中で、彼女は「大戦争」にふれて次のように語っている。「ずっと編み物ばかりしていたので、当然、遊ぶ時間もなくなりました。みんなが待っているとと言われて、罪の意識にせかされていた。塹壕のなかで襟巻きを待っているかわいそうな兵隊さんがいるから、早く仕上げあげないと凍え死んでしまうんですって。それにしても、私にはわからなかったわ。私みたいな子どもに延々とこんなつらい仕事をさせておいて、おとなたちはそれを見て立派だ、感心なことだって喜んでいのよ。なぜでしょうね。子どもに対していささかサディスティックでした」<sup>47)</sup>。

戦争が終わり、広場で浮かれ騒ぐ人びとを見たとき、ドルトは「死んだ人やまだ帰ってこない人たちのことを忘れて、どうしてこんなに大喜びできるの？」と疑問を感じる。叔父をはじめ、身近な人びとがいく人か戦死していた。「あんなに悲しいことだったのに！ もう誰もそのことを考えていないみたいに、みんなが笑っていたわ。これには心底驚いたの」。ドルトはその日の記憶を、ずっと忘れなかった<sup>48)</sup>。

シモーヌ・ド・ボーヴォワール Simone de Beauvoir も、1908年に保守的なカトリックのブルジョワ家庭に生まれたから、ドルトと同年である。

開戦後、彼女は包帯を作ったり防寒頭巾を編んだり、寄付を集めたりした。ドイツ製の人形を踏みつけ、花瓶に連合軍の旗をさし、色鉛筆でフランス万歳と書いて、「模範的愛国主義の証しを立てた」。すると、「おとなたちは、私の盲従をほめたたえた」<sup>49)</sup>。

ところが、1918年の冬は厳しく、食糧事情は悪く、空襲が続いた。身近な人びとの戦死もあり、「私は恐ろしさに息が詰まった」。だが大人たちは、彼女や妹の前でこう言った。「この子たちは、子供だからいいわね！ まだ何もわからないんだから……」ボーヴォワールは「たしかに、おとなたちは私たちのことを何も知らないんだわ！」と考えた。彼女はひどい絶望感に襲われるようになり、あるとき思わず、戦争が早く終わればいい、どんな終わり方でもいいから、と口に出した。すると母は「そんなことを言うもんじゃありません！ フランスは勝たなくてはなりません！」と彼女をたしなめた。ボーヴォワールはそのために、自分を恥じなくてはならなかった<sup>50)</sup>……。聡明な少女たちのこのような「戦争体験」からは、当時の「おとな」のあり方が、おのずと浮かび上がってくる。

けれども、子どもを戦争に駆り立てる大人ばかりがいたわけではない。本稿を閉じるにあたって、ひと組の親子の実例を紹介しよう<sup>51)</sup>。戦争について子どもたちに語るとき、伝えてみたい話である。彼らはどのように感じるであろうか。

マルタン・ヴァイヤグー Martin Vaillagou は、1875年に南仏のケルシーで生まれ、1900年に結婚しパリに出て、左官工事の事業で成功し、ふたりの子どもにも恵まれた。彼はジョレスを賛美し、時に詩作も行うような人物であったが、開戦後、歩兵第247連隊に配属された。

出征する父に、長男のモーリス Maurice がおみやげをねだった。ドイツ軍の銃弾と、ドイツ軍兵士の兜を取ってきてほしいというのである。父は戦場から、息子にこう書き送った。「私はできる限りモーリスの願いをかなえてやるつもりだ……ドイツの弾なら手にはいるだろう。帰ったとき、もって行ってやるよ。プロイセン兜については、わからないな。今は奴らに帽子を脱がせる時じゃないんだ。寒すぎるから、風邪をひいちゃうかもしれない。それにね、モーリス、プロイセン人だって、われわれと一緒にだって考えてみなくちや。プロイセンの男の子がお前と同じようにお父さんに手紙を書いて、フランス人の軍帽をねだり、そのプロイセン人のパパが息子に持っていったのが、お前のお父さんの軍帽だったとしたら？ お前は

どう思う？ この手紙をとっておくんだ。そしてもっとあとで、お前が大きくなったときに、読むんだよ。もっとよくわかるようになるから」。

ヴァイヤグーは1915年8月に戦死した。働かなくてはならなくなったモーリスは、化学工場に勤め出したが、1918年1月、戦争の帰趨も知らぬまま、急性白血病で帰らぬ人となった。父の手紙を読み返し、戦争について考えるための時間が、彼にどれほどあったらうか。この世を去ったとき、まだ14歳であった。

## 注

- 1) René Ponthus (texte par), *Au temps de la Grande Guerre*, collection « Des enfants dans l'Histoire », Casterman, Paris, 1998. 著者はヴァル＝ド＝マルヌ県古文書館などで歴史教育に携わった経験を持つ歴史家である。また Thierry APRILE (raconté par), *Pendant la Grande Guerre : Rose, France, 1914-1918*, collection « Le journal d'un enfant », Gallimard Jeunesse, Paris, 2004. この著者も歴史学のアグレジェ資格を持ち、教師教育などの活動を行っている。なお、フランスには同種のものとして、他にも、次のような子ども向け歴史読み物のシリーズなどがある。Philippe GODARD, *La Grande Guerre 1914-1918*, collection « La vie des enfants », Éditions du Sorbier, Paris, 2003. また、スイユ社から出版されている「子どもに語る」シリーズでは、現代史家プロが第一次世界大戦を取り上げ、戦争の経過などについて詳しい解説を行っている。Antoine PROST, *La Grande Guerre expliquée à mon petit-fils*, Seuil, Paris, 2005.
- 2) 攻撃命令への不服従や敵前逃亡の罪で処刑された兵士に関する子ども向けの本として、イギリスの例であるが、マイケル・モーバーゴ、佐藤見果夢訳『兵士ピースフル』(評論社・2007年)をあげることができる。
- 3) Stéphane AUDOIN-ROUZEAU, *La guerre des enfants 1914-1918 : essai d'histoire culturelle*, Paris, 1993.
- 4) 大戦当時パリの初等学校生徒であった子どもたちが描いた戦争の絵に関する研究として Manon PIGNOT, *La guerre des crayons : Quand les petits Parisiens dessinaient la Grande Guerre*, Paris, 2004. 戦争中の子どもの日記については Yves CONGAR, *Journal de la Guerre 1914-1918*, Paris, 1997. 戦争で親を亡くした子どもについては Olivier FARON, *Les enfants du deuil : orphelins et pupilles de la nation de la première guerre mondiale (1914-1941)*, Paris, 2001. さらに現代史研究誌『20世紀』における次の特集号 *Enfances en guerre, Vingtième Siècle, spécial, jan.-mars, 2006* や、Jean-Louis PILLIAT, “1914-1918, la ‘mobilisation’ des enfants”, *Gavroche : revue d'histoire populaire*, mars-avril, 1996 など参照。戦

- 争と子どもについては、以前からもたとえば人口政策との関わりで、第一次世界大戦期が取り上げられたりしているが (Marie-Monique HUSS, “Pronatalism and the popular ideology of the child in wartime France: the evidence of the picture postcard” in Richard WALL and Jay WINTER, *The Upheaval of War: Family, Work and Welfare in Europe 1914–1918*, Cambridge UP, 1988)、子ども自身に焦点をあてた研究は、最近の傾向と言えよう。
- 5) AUDOIN-ROUZEAU, *La guerre des enfants*, p. 24.
  - 6) *Ibid.*, p. 27.
  - 7) *Ibid.*, pp. 33–34.
  - 8) PIGNOT, *La guerre des crayons*, pp. 16–19.
  - 9) AUDOIN-ROUZEAU, *La guerre des enfants*, pp. 35–36.
  - 10) PIGNOT, *La guerre des crayons*, pp. 120–122.
  - 11) AUDOIN-ROUZEAU, *La guerre des enfants*, p. 46.
  - 12) *Ibid.*, pp. 45–46.
  - 13) *Ibid.*, pp. 47–48.
  - 14) *Ibid.*, p. 49.
  - 15) *Ibid.*, p. 53.
  - 16) *Ibid.*, pp. 38–39.
  - 17) *Ibid.*, pp. 40–41.
  - 18) PILLIAT, “1914–1918, la ‘mobilisation’ des enfants”, p. 12.
  - 19) Manon PIGNOT, “Les enfants” dans Jean-Jacques BECKER et Stéphane AUDOIN-ROUZEAU, *Encyclopédie de la Grande Guerre 1914–1918. Histoire et culture*, Paris, 2004, p. 632.
  - 20) AUDOIN-ROUZEAU, *La guerre des enfants*, pp. 95–96.
  - 21) *Ibid.*, p. 98.
  - 22) *Ibid.*, pp. 86–87.
  - 23) *Ibid.*, p. 92.
  - 24) *Ibid.*, p. 86.
  - 25) PIGNOT, “Les enfants”, p. 627.
  - 26) PIGNOT, *La guerre des crayons*, pp. 20–29 ; AUDOIN-ROUZEAU, *La guerre des enfants*, pp. 161–162.
  - 27) PIGNOT, *La guerre des crayons*, p. 54.
  - 28) *Ibid.*, p. 52.
  - 29) *Ibid.*, pp. 52–53.
  - 30) *Ibid.*, p. 53.
  - 31) Jean-Pierre GUÉNO et Yves LAPLUME (sous la dir. de), *Paroles de Poilus : Lettres et carnets du front (1914–1918)*, Paris, 1998, pp. 138–139. ルーマニア系移

- 民であったこの父親は、戦争から生還はしたが兵役で体を壊し、1920年代に死去している。
- 32) AUDOIN-ROUZEAU, *La guerre des enfants*, p. 165 ; PIGNOT, *La guerre des crayons*, pp. 20–23.
  - 33) PIGNOT, *La guerre des crayons*, pp. 96–103.
  - 34) AUDOIN-ROUZEAU, *La guerre des enfants*, p. 162 ; PILLIAT, “1914–1918, la ‘mobilisation’ des enfants”, p. 11.
  - 35) PIGNOT, *La guerre des crayons*, pp. 30–33.
  - 36) Stéphane AUDOIN-ROUZEAU, “L’enfant héroïque en 1914–1918” dans Jean-Jacques BECKER et al., *Guerre et cultures : 1914–1918*, Paris, 1994, p. 176.
  - 37) AUDOIN-ROUZEAU, *La guerre des enfants*, p. 143.
  - 38) *Ibid.*, pp. 136–137.
  - 39) *Ibid.*, pp. 146–147.
  - 40) 天野知恵子『子どもと学校の世紀——18世紀フランスの社会文化史』（岩波書店・2007年）第4章参照。
  - 41) AUDOIN-ROUZEAU, *La guerre des enfants*, pp. 138–141.
  - 42) PIGNOT, *La guerre des crayons*, pp. 88–95.
  - 43) *Ibid.*, p. 126 ; AUDOIN-ROUZEAU, “L’enfant héroïque en 1914–1918”, pp. 181–182.
  - 44) 天野、前掲書、第4章参照。
  - 45) 一例として、1915年10月から16年9月の間に、セーヌ県で少年裁判所に告訴された13～18歳の事例は2419件で、1914年10月～15年9月の1178件と比べ、倍増している。AUDOIN-ROUZEAU, *La guerre des enfants*, p. 63.
  - 46) *Ibid.*, p. 182.
  - 47) フランソワーズ・ドルト、東郷和子訳『少女時代』（みすず書房・1996年）28頁。
  - 48) 同上、36–37頁。
  - 49) シモーヌ・ド・ボーヴォワール、朝吹登水子訳『ある女の回想1——娘時代』（紀伊國屋書店・1961年）23頁。
  - 50) 同上、56–57頁。
  - 51) 以下ヴァイヤグー父子については、GUÉNO et LAPLUME (sous la dir. de), *Paroles de Poilus*, pp. 45–46.